

～ 台風予測の
言い伝え ～

梅雨空から青空へ。夏の足音が近く聞こえて来ましたね。夏といえば、やはり、台風のことにははずせませんよね。現在は便利に天気情報が得られますが、それ以前は、雲の形や空の色、草木や生き物たちの状態など身近な自然を注意深く観察することで天気具合をさぐり、「言い伝え」として伝承していました。例えば、デイゴの花がたくさん咲いた年は台風が多いというのを聞いたことがある方も多いかと思えます。漁業や農業を営む人々にとって、台風を予測することは、すなわち命を守るためでもありました。

我謝ガンドゥーぬ鳴いねー
雨

(ガンドゥーとは岩礁のこと。小波津川河口約1km付近の我謝のさんご礁地帯で海鳴りがすると、雨を降らせる台風が接近する)

津堅ガンドゥーぬ鳴いねー
風

(津堅島付近で海鳴りがすると、台風が襲う)

これは『西原町史 民俗編』にも載っている言い伝えです。海鳴りとは、大きな波が海岸で砕ける時に空気を巻き込んで発する音のこと

で、それを台風の予兆だとしたのです。

その他「ギキジャー(ゲツキツ)の花がいっぱい咲くと台風が来る」とか「ナージチュー・ナーダチュー(ハイキビ)の葉にある節の数で、その年の台風の数がかかる。節の数が多いと台風の数が多い」という言い伝えを西原の各字で聞くこともできました。

残念ながら、我謝ガンドゥーは埋め立てのため、どんなふうにも鳴ったのか今は聞くことはできませんが、ギキジャーの花、ナージチューの葉は見つけられますよ。

これらの経験的な天気予報。絶対当たる!というわけではありませんが、長い時間かけて、自然のしくみを観察し、その情報を蓄積してきた結果であることを考えると、興味深い知識だと思いませんか。



昨年のゲツキツの花。さて今年の台風は?